

## ひょうご聴障ネット講演会 2013年5月12日(日) 婦人会館 さくら

### 講演会：「生き生きと働くなかまたち ～共同作業所の現状と課題～」

講師：山崎玲輔氏

まず、4作業所から現状と課題について報告いただき、それを受けて、兵庫セルプセンター副理事長 山崎玲輔氏にご講演いただきました。

#### ●はりまふくろうの家

こんにちは。どきどきしているので、うまく話せるか分かりません。手話も早いのですが、できるだけ、ゆっくり話したいと思います。よろしくお願いします。

はりまふくろうの家から来ました。施設の経緯を簡単にお話しします。小規模作業所から就労継続支援B型事業所となりました。最初は6人だったのですが通所者も少しずつ増えて、現在は13名です。楽しくやっています。

作業内容は主におにぎりの製造販売です。一週間で一番忙しいのは木曜日ですが市役所のロビーで11時から1時半まで販売しています。時々残ってしまうこともありますが、ほぼ完売しています。職員で調理の得意な人に指導担当をお願いし、利用者さんはおにぎり・つけもの・おかずなどを詰めていくのを覚えて幅広く作業をしています。以前はいろいろ指導が大変でしたが、それぞれ頑張っ身につけてきています。

利用者はろうあ者だけでなく、車椅子の人もいます。今年1月に入ってから約4か月になります。最初は受け入れについて考えましたが、障害に関わらず、受け入れることになりました。コミュニケーションは手話です。手話を教えるというより、利用者と一緒にコミュニケーションをとりながら、少しずつ見て学んでいくという感じです。聞こえている人から見ると、ろうあ者が声を出して手話をするのはどう見えるかと思っていましたが、少しずつ慣れて一緒にがんばっています。

足が不自由で歩けません、以前は、会社で普通に仕事をしていました。仕事上の事故で歩けなくなったそうです。その後、たつの市の事業所に入りましたが1年半程で辞めて、今は当作業所にいます。掃除や料理など、積極的に頑張りたいと言われています。ここでの生活にも慣れて、明るく過ごされています。パンやケーキの製造経験もあり、行事の時には他の利用者さんとお菓子を楽しく作られています。もっと何でも学んでいきたいとのこと。障害に関わりなく一緒に作業できる事はとてもいいことだと思います。

もう1人。姫路ろう学校を卒業後会社に就職したが、お母さんが亡くなられたり、職場でのコミュニケーションがうまく行かなかったりして精神的なストレスが重なり仕事のミスが増えたそうです。会社としては止む無く、やめて貰う方向を取り、退職することになりました。聴覚障害者情報センターに相談に行ったそうです。ハローワークへも行った後、はりまふくろうの家に来られました。初めはこの作業所は合わないと思っていた

ひょうご聴障ネット講演会

「生き生きと働くなかまたち～共同作業所の現状と課題～」

たようですがいろいろ考えて気持ちも変わり、通所が始まりました。通所は安定していたのですが、信頼していたお兄さんの結婚が決まったところから寂しかったり精神的な不安が出てきたりで、家族間のコミュニケーションが上手くいかないために粗暴な行為を受け、家を飛び出すことが起きました。入院することになりましたが職員としては病院に様子を見に行き、コミュニケーションをとっていました。コミュニケーションがうまくいかなくなってきたこともありましたが、少しずつ改善してきて退院することが出来ました。

もう1人、入院していた人がいます。女性ですが、バスから降りたときに痴漢にあったことから被害妄想となり、精神不安で三か月ほど入院になりました。通所は再開しています。60歳を超えていますが、今は姫路駅までバスで来て、作業所間を車で送迎したり、自力徒歩で来たり、その時の体調などに合わせて通所の方法を変えています。

もう一人は、目が見えにくくなったので、急に暗いのが怖い状態が度々あり、ストレスから精神的に不安定になりました。お兄さんと相談していたのですがご家族の判断で、入院となりました。入院前に情報センターへ相談に行ったりもしてほしかったのですが、相談もないまま、入院になりました。このように情報を受ける、事前にキャッチする事や相談できる場に繋がりません。職員としてどう対処すればいいかいつも思案しています。

入院後、情報センターから講師をお招きして、盲ろう者についてお兄さんと学習した事があります。目の見えにくい人に何をすればいいか、まだまだ考えなければなりません。ホワイトボードに書いて見せると見えにくい。黒板に白い文字が良いとわかりました。そうした工夫をしながらこの入院中の利用者さんとコミュニケーションを取っています。

現在の利用は65歳までになっていますが、退所してどうすればいいか、その後が心配です。行政からの指導もあるとのことですが、こちらとしては残ってほしいがどうすればいいかわかりません。両親もなく、一人暮らしになった方のグループホームを作りたいと思っていますが今後の課題です。以上で終わります。有難うございました。

## ●夢ふうせん

地域活動支援センター夢ふうせん（紙ではありません）の施設長岩崎です。よろしくお願ひします。昨日から緊張していて、ほとんど寝ていません。少し寝たときに夢で「しゃべり方が早い」としかられる夢を。もしも早くなっていたら、しかってください。

「夢ふうせん」をご存知ですか？半分くらい。今日もたくさん盲ろう者が参加していますが、盲ろう者が通所している施設です。現在11名。神戸8人、三木市2人、川西市1人、合計11人が入れ替わり立ち代り、作業所に来て、いろいろなことをしています。

「盲ろう者が集まれる場所を！」というのが、設立のきっかけでした。最初はとりあえず集まれる場所を借りることになりました。小さい10坪のところから始まりました。そのときは、狭くて荷物と人が入ると移動もできない状態でした。その後少し広い所に引っ越して、今の場所になりました。今も普通のマンションですので、荷物が入ると一杯です。

現在登録者は11人ですが、一斉に集まることはありません。だいたい4～5人、最高で10人ぐらいです。全員が集まったことはないと思います。そこで作業します。

ひょうご聴障ネット講演会

「生き生きと働くなかまたち～共同作業所の現状と課題～」

盲ろう者が自分で1から10まで作業をすることは難しいです。細かい作業もあります。針に糸を通すことができない盲ろう者もいます。できる人もいます。平田くんです。針に糸を通すのがとても上手です。(平田/そうです。)針の穴が見えないので道具は使いますが、針に糸を自分で通します。でも、糸の色は分かりません。青・赤・黄色ぐらいは見えますが、微妙な雰囲気はわからず、ボランティアさんに助けられています。夢ふうせんは、ボランティアの力が本当に大切です。

作業所では、最初は雑巾を作りました。次にハサミを使わない封筒を作りました。でも、それでは売り物にはなりません。雑巾は、今100円均一で売っていますから、買わないです。販売できるものを作りたい。でも、1から10まで盲ろう者が作ったものはなかなか売れない。それが現実です。盲ろう者ががんばって作りました、買ってください、と言うと、最初の1つか2つは寄付の気持ちで買ってくれますが、後が続きません。世の中厳しかったです。

そこで考えました。1から10まで盲ろう者が作るのではなく、一部でも盲ろう者が作ったものを販売しようと考え方を変えました。例えば、盲ろう者が織ったさをり織りを使った商品、一部でも刺繍をしたもの、それをボランティアが加工して、品物にする。今もそのやり方です。

最初が雑巾、封筒。次は携帯用ホワイトボード。この中にも使ってくださっている方もおられると思います。今日も売っているので、よろしくお願いします。それは15年くらい前に作り始めて、今も定番商品として続いています。改善も重ね、いまは落ち着いています。

商品を作るだけでは、社会参加は難しい。だから、訓練もしています。まず、パソコン訓練。見えない盲ろう者がどうやってパソコンをするのかと思われると思いますが、パソコンに点字ディスプレイをつなぎ、画面を確認することができます。今日の参加者にも、それを使ってインターネットやメールを楽しんでいる盲ろう者がいます。パソコンでの検索、メール送受信もできます。画面が見えなくても、点字で確認しています。

他に、点字の触読もしています。パソコンをするには画面が見えない、次に頼るのは、やはり点字です。そのために、触読から始めています。

指点字もあります。6つの点で、50音、数字、アルファベットのすべてが表せます。でも、中途失明の方にとって、点字の壁はかなり高いのです。少しずつ勉強して、作業所でも点字の触読の訓練をしています。

あとは文章の訓練。知りたい情報を新聞などから引用して、言葉を勉強したり、文章の作り方を勉強したりしています。

作業所には、ボランティアが必要と言いましたが、盲ろう者には、サポートは一人に一人ずつつけるのが理想です。でも、ボランティアの確保がなかなかできなくて、職員1人に盲ろう者2人とか、盲ろう者3人のときもあります。そのような時には盲ろう者が我慢してくれている状況です。情報を待ってくれたり、漏れてもしかたないと思っているかもしれせん。

ひょうご聴障ネット講演会

「生き生きと働くなかまたち～共同作業所の現状と課題～」

でも夢ふうせんでコミュニケーションができ、おしゃべりができる。笑ったり、怒ったり、たまにはけんかもあります。けんかできることはコミュニケーションができることです。コミュニケーションがないとけんかはできないと思います。コミュニケーションができる場所、「夢ふうせん」を続けることができればと思っています。

今の課題はボランティアさんの確保と運営費の捻出、この2つが作業所としての大きな課題です。ありがとうございました。

## ●たつのころうあハウス

皆さん、こんにちは。たつのころうあハウス管理者の藤本です。皆さんのお持ちの資料に、事業所の資料があります。今回は就労継続B型、たつのころうあハウスの報告をします。

今たつのころうあハウスは2カ所に分かれて作業しています。昨年4月からろうの仲間とろう重複の仲間を分けました。長年、ろうの仲間とろう重複の仲間と一緒に作業をしてきましたが、技術的な部分で差があったり、重複の仲間が遠慮したり、差別的な見方も出てきたりしました。ろう重複の仲間には自由な発言の場を与えたいと考えて、分けて作業することにしました。

ろう重複の仲間は、表現方法はばらばらで、手話という言語もなく身振りだけの方もたくさんいますし、独自の表現の方もありますので、できるだけ言いたいことを引き出して、保護者のニーズでもある、「行動を言葉に変える」ということを中心に考えて支援しています。

ろうの仲間は作業はスムーズにできますので、目標工賃を達成することを目標に作業をがんばってもらっています。

定員は20名ですが、今仲間はあわせて18名です。年齢は幅広く19歳から78歳までです。平均年齢は48歳。40代が一番多いです。どこの施設も同じだと思いますが高齢化が進んでおり、病院の付き添いや入院時支援も必要です。薬を飲む方が増えているので、その管理も必要です。介護サービスと連携しながら支援しています。

40代50代の仲間の保護者は今、70代80代になられていて、自分たちが亡くなった後の子どもたちの生活が心配との声をかなり前から聞いています。その声に応え、ホームの事業に乗り出そうと、繰り返して議論をしていますが、夜間の職員の確保が難しく、なかなか前進しません。

ろう者、ろう重複の仲間たちには手話のできる職員が必要です。そこを考慮すると、昼間でも手話のできる職員の確保が難しいのに夜の人材確保はさらに難しくなる。ろう重複の仲間たちは、毎日一緒にいて信頼関係ができてこそやっと心を開いてくれます。自閉的な面もあります。団体生活になじめない人もいますので、ホームの職員を探すにあたっては、十分コミュニケーションをとって信頼関係ができた上での生活支援を考えなければなりません。

ホームの申請を事務的にするのは簡単です。ですが受け入れた仲間を生涯支援していく

体制がたつこととしてどこまでできるか、責任が伴います。簡単に受け入れます、と言っても受け入れた後で、途中で運営が無理になってやめたり、「職員不足で出て行って」とは言えないので、長い目で職員体制を考えたり、上の団体、ろうあ協会と考え方もしっかりした上で事業を開始すべきと思っています。

高齢者の生活面の支援をコミュニケーション面から考えると、地域資源が少なく、個人の性格やコミュニケーションの特性をみながら、病院、介護サービスにつなげるようにしています。

作業は、幸い忙しく、いろんなところから作業をいただき、進めています。2月になると、以前は作業がなくて暇な時期がありました。最近はその時期も忙しくなりました。

作業は紙袋、箱作り、封筒入れ、ラベル貼り、自主製品の販売、ポストイン、掃除など。昨年度の目標工賃は、時給 140 円でした。1月～3月は達成しました。今年度も今のところ達成しているので、引き続き 140 円を目標とします。

たつこととして年1回の旅行と年2回の社会見学を実施していますが、それとは別にろうあハウスとして遠足、料理教室などしています。重複の仲間たちの「行動を言葉に変える」支援の一環として、ジェスチャーゲームやかるとなど言葉を読み取り、意味を考えてカードを取るゲームをし、言葉を身に着けるために、言葉を使ったゲームをしています。ただ、今は作業が忙しくなかなか実行できないのが反省点ですが、今年度も、尼崎市内の高校生や聴覚特別支援学校の実習生の受け入れ予定があるので、交流を兼ねて言葉遊びのゲームを続けたいと思っています。

料理教室については、年2回行っています。買い物に行き、何が必要か考えたり、材料の名前を覚えたり、切る、焼く、炒めるなど料理の作業や言葉を知りながら、生活の自立に繋がりたいと考えています。

就労支援については、面接や実習など、必要に応じて支援をしています。昨年度は1名、就職しました。現在、就職希望者は3名です。履歴書の書き方、面接での態度や受け答えなどの練習をしています。また、面接に同行しての見守りもしています。

職員の体制については、正職員は6名、パートが2名です。そのうちろう職員が4名、健聴職員が4名です。事務職を設けていないので、職員が作業支援、生活相談をしながら事務作業もしています。職員の負担も今後考えないといけないと思っています。

今後は、高齢者の支援、1人になる仲間の生活の支援が大きな課題になると思います。以上です。ありがとうございました。

## ●おのころの家

おのころ家のできた経緯については、ひとりぼっちのろうあ者をなくそうと、地元のろうあ協会と取り組んできました。平成12年にオープンしたので、13年になります。これまでは運営面で厳しかったのですが、今はなんとかやっています。今後はどうなるか、いろいろと考えないといけません。現在、登録は30名くらいです。今後の不安があります。ろうあ者以外の知的障害を持つ人にも働きかけています。1日の平均は15名くらいが通所し

ています。

利用者の状況について。聴覚障害者が17名。難聴者が11名。重複が3名。精神障害が2名。その他2名で、合計36名です。精神、知的の方は聞こえますので、聞こえない人への対応が課題です。

先ほど申しましたが、70～80代が一番多いです。死亡や体調不良や家庭の事情で通所者の減少につながっています。平均年齢は67歳です。自立支援法とは合いませんが、65歳以上でも作業所に来たいのが現状です。

事業活動です。おのころ屋では焼き菓子を販売しています。縫製品及び木工製品の製造、委託事業としては、清掃や除草。請負会社よりの受け取り業務や販売もあります。昨年6月からパソコンを使っての就労事業もしています。

事業の様子です。知的障害の方に対して、さおり織りを使ったわらじの製作販売もしています。その時だけしていたもので、いつもではありません。コミュニケーションは通じない面もあり、筆談の必要な人もいて、職員の負担となっています。

スタイのベビー（よだれ掛けのこと）ですが、これを4月から洲本市福祉課（子育てネットワーク協議会）の依頼で制作しています。後ろでも売っていますので、お買い求めください。子猫の小物入れです。5月～6月くらい、退職祝いとしての発注を受けています。制作して納品できました。やりがいのある仕事でした。

箱折りですが、線香の会社からの依頼です。2カ所やっています。右の写真は毎日香です。3年前からはじめました。みんなでならんで作業しています。

おのころ屋のパンの制作、袋詰めの様子です。名前のシール作りの手が足りなくて、職員に貼ってもらっています。きちんと貼らないといけないので、練習が必要です。

清掃の委託事業が2カ所あります。介護施設の淡路ふくろうの郷と別の老人ホームからの委託を受けています。掃除と施設周辺の草刈りを請け負っています。ふくろうの郷では週3回、もう一つのホームでは週に2回です。夏や冬は大変です。80歳の方でも休まずにされています。私たちとしては健康に不安なのですが…。入れ歯を落としたこともありました。「きれいにしておかないといけない」と言っているのですが、「大丈夫」ということです。本当に大丈夫でしょうか。

生活訓練と社会との交流の場、各種行事の様子です。歯科検診です。入れ歯の方が80%です。手入れなど面倒な面はありますが、その指導も必要です。料理訓練です。簡単なものでも作り方を覚えなさいといけません。これは餃子です。こちらは好み焼き。このようなものを作っています。先日地震がありましたが、避難訓練も実施します。連絡方法に不安があるので、安否確認をするところもありました。ストレッチ体操をしています。

おのころ屋です。昨年5月の総会で発表したと思いますのでここは省略します。

クッキーの制作販売です。ラッピングを注文して受注生産も始めました。

30種類のパンを作っています。

おのころ屋の製造者は5人です。2年前の設立当時は2人でしたが、今は5人。ろうあ者が3人、知的障害が1人、健常者が1人です。コミュニケーションがなかなか大変なよ

うです。

これはクッキー製作の様子。下はパンです。

袋詰めの様子。

真ん中の人は知的障害の方で、練習しながらやっています。声かけが必要です。右は健聴者です。

これは 2 年前の様子。予定が書きなぐられています。大変バタバタしていました。今はもう少しましになっています。

店内だけでなく、移動販売もしています。週 3 回程度販売しています。30 カ所ほどまわり、販売していますが、おのころ屋職員だけでは難しいので、おのころの家職員が交代で協力しています。

平成 24 年度の販売実績です。550 万円程度。もう少し収益を上げないといけないと思っています。

ふくろうの郷のフランス料理の会で、バジルパンを受注して製作をしました。

ふくろうふれあい祭りでカフェを開いて、パンだけでなくケーキも出しました。喜ばれました。

特別支援学校依頼の実習も受け入れています。洲本実業高校からも 2 名、将来のために実習に来られました。手話でのコミュニケーションは指文字と簡単な挨拶くらいでした。

昨年、地域生活支援センターとして、月に 1 回程度、カフェを開きました。

以上です。ありがとうございました。

## ●山崎玲輔氏講演

《プロフィール》三田谷学園、芦屋翠ホーム、ワークホームつつじ、宝塚さざんか福祉会など、様々な障害者施設の事業運営に携わって来られ、現在は知的障害者施設「いきいき宝塚」と「ワークプラザ宝塚」の統括管理者。特定非営利活動法人兵庫セルフセンター副理事長の他、兵庫県社会就労センター協議会協議員、宝塚市自立支援協議会しごと部会部会長、関西国際大学非常勤講師、など様々な役職も兼任され、広く活躍されています。また、小規模作業所等の運営の悩みや不安などを解消するための「神戸市小規模作業所等事業サポーター制度」がスタートした当初から、事業サポーターとしても活動されています。

皆さまこんにちは。今ご紹介いただきました、兵庫セルフセンターの山崎です。宝塚の施設の施設長も務めていますが、今日は、兵庫セルフセンターの山崎としてお話しします。先ほど 4 か所の作業所から現状の報告がありました。それについてコメントをさせていただきます。

兵庫県は全国で小規模作業所が一番多い県でした。一番多いときは約 500 カ所ありました。兵庫県は小規模作業所の運営要綱がゆるやかだったからです。利用者が 5 人いて管理

ひょうご聴障ネット講演会

「生き生きと働くなかまたち～共同作業所の現状と課題～」

者が1人いれば県と市町の折半で運営できるという運営交付金がありました。ある意味では、小規模作業所の作りやすい県でした。

兵庫県に来る前は東京にいました。そこで、小規模作業所を立ち上げた経験があります。当時は無認可作業所でした。兵庫のような運営基金がないときに、全く自主財源での運営を40年前に経験しました。ですから小規模作業所が抱える問題は、私自身の仕事の一番最初でしたから、体が覚えています。

1つずつお話しします。「はりまふくろうの家」さん。おにぎりを作られている。木曜日に市役所のロビーで販売されているとのこと。非常に面白い企画ですね。後でまた触れますが、私のいる兵庫セルフセンターは、兵庫県庁2号館の1階でカフェセルフを3年前から運営しています。その目玉として、作業所のお弁当を販売しています。今6か所の作業所のお弁当を毎日約50食販売しています。それをそれぞれの課に配達します。庁舎内ネットで予約を受けて販売しています。毎日50食が完売しています。4年目です。この事業は展開する市場があると思います。タイムリーに中身を変えることで、ますます発展すると思えました。

ひとつ気になったことです。現在は65歳までという入所制限があるという話でした。65歳以上は介護保険の世界になります。でも、65歳までに障害福祉サービスを使っていると、65歳になっても継続して障害福祉サービスを使えるということ覚えていてください。

2つ目「夢ふうせん」さん。神戸市が昨年度まで実施していた制度で、兵庫セルフとして、小規模作業所が新体制に移行するときのサポートをさせていただいていました。5年前まで神戸市内で144カ所の小規模作業所がありましたが、昨年度末までにゼロになりました。全てなんらかの新体系事業、地域活動センターに移行しました。毎回サポーターの連絡会で話題になっていたのが、「夢ふうせん」さんでした。夢ふうせんのもっている必要度やどういう方が使われているのかという実態を神戸市は認識すべきじゃないかと議論していました。そんな中で「夢ふうせん」がなかなか移行できない時に、神戸市中央区の自立支援協議会にこれが一番のテーマだと投げかけました。今は地活で運営されていると聞き、ホッとしました。それも一つの選択肢だろうと思えました。

夢ふうせんの報告の中で大事なことを言われました。各作業所が自主製品で授産作品を作っておられるところが多いと思いますが、「売れるものを作る」というその発想、それが一番大事なことです。兵庫セルフセンターの話も後程しますが、その考え方が基本です。消費者目線をしっかり押さえることは大事だと思えました。

3つ目「たつのころあハウス」さん。将来高齢とか单身になった後の生活場をどう作るのか、という話がありました。今朝の朝日新聞1面トップに、総務省消防庁の見解が出ていました。小規模宿泊施設の火災基準がきつくなるということです。その中にグループホームやケアホームのこともでていました。私は日本グループホーム学会というところに入っているという情報を得ているのですが、毎回、消防や県とも話しています。私は宝塚のさざんか福祉会にいます。3年前までそのケアホームの責任者でした。今は宝塚でケアホームを16カ所運営しています。消防、県の障害福祉課とも話していますが、消防庁はケア



ホーム、グループホームを学校の寄宿舎と同じような扱いにしたいと思っているようです。

実は普通の民家と寄宿舎の一番大きな違いは、消防法の適用です。例えば、2方向避難、廊下の幅などです。今はほとんど民家を借りて、ケアホーム、グループホームを運営しています。そうすると、2階建ての家を借りたとすると、2階にも外階段が必要となります。2方向避難とはそういうことです。それと問題になっているスプリンクラー。275平米以上では必要ですが、寄宿舎扱いならその適用外です。スプリンクラーや避難階段をつくる費用は誰に転嫁するのか、ということです。神戸市では、ケアホーム設置の際200万円まではスプリンクラーの設置保険が認められていますが、県下全域では市町村の考え方によってまちまちです。

障害者の高齢化に向けての課題はますます難しくなっている、そんな現状をご承知いただきたいと思います。

4つ目。おのころの家の報告では、非常に重要な話が1つありました。スタイ…よだれかけです。私の娘が半年ほど前に出産しまして、私は若く見えますがじいちゃんです。昨日も1日孫と遊んでいました。スタイを市の子育て支援課から発注を受けているという話がありました。これは非常に大きなことです。

お配りしたチラシに書かれていますが、4月から優先調達推進法がスタートしました。官公庁が中小の事業所に出していた仕事を何%かは障害者の就労の場に流さないといけないという法律です。まず国が基準を出し、次は県が基準にそって仕事を出す。その次は市町がその基準に沿って、障害者の就労施設に出していく仕組みになります。そういう面では子育て支援課からスタイの注文があるのは、実績として大きな事だと思います。

他のところでも、役務の作業、除草などですが、行われているということでした。優先調達法の中で、障害者がどういう場面で作業参加できるかということ、一番大きな場面として考えられるのは、役務です。その中でも除草作業やビルの清掃などが考えられます。他には印刷、記念品などが考えられます。その面では、おのころの家がやっているスタイの縫製は、将来的につなげていける仕事だと思います。頑張ってください。

本題から少し離れますが、2年2か月前に東北で大地震がありました。この2年間で、私も20回、延べで90日ほど東北に支援に行きました。最初は兵庫セルプという立場で、被災した作業所に仕事を新しく作り出す提案を持ち込み、現地で展開してきました。宮城県を中心に、のべ90日ほど支援に入っています。おかげで宮城県内はナビがなくても全部回るまでになりました。

そこでびっくりしたことがあります。現地の作業所は、授産品の精度が非常に高い。特に縫製などもすばらしい。例えば、トヨタ車のシートも全部作業所が縫製している。レトルト食品を一手に引き受けている施設もあります。

2年前の夏に被災者を励ますためのイベントを企画しました。その時に全国の授産施設のイベントカー、つまりバスやトラックを改造してそこで販売する車を、全国から5台集めました。うち4台は宮城県のものでした。カレーを販売する車、ジェラートを販売する車、

ぎょうぎを販売する車などです。ぎょうぎは大阪の作業所が作ったものです。それを冷凍して宮城に送って、宮城の施設が県内をイベントカーで販売していました。愛知県の車で、ラーメンカー。日本財団から寄贈されたものです。ラーメン鉢まで日本財団のマークが入っていました。

宮城の授産関係施設は非常にレベルが高いです。一様に皆さんが言うには、消費者目線を持った事業展開をしています、と。売れるものを作って売っている。一方通行ではなく、リピーターが常にいる事業展開をしている。被災地に支援に行き、今も継続して行っていますが、逆にいろんなことを教えられました。

前ふりが長くなりましたが、今から兵庫セルフセンターの事業展開の話をしていきます。先ほど、おのころの家で、イオングループでのパン販売の話がありましたが、3年前に西日本のイオングループと兵庫セルフと県の3者で、イオングループ全店で障害関係の事業所の物品を定期的に販売するという契約をしました。今兵庫県内にはイオングループの大きな店舗が20か所ほどあります。そこで年に何回と決めて、共同販売を展開しています。最初はこちらからスタッフが現地に行き、地域の作業所にいついつやります、と声かけをして、販売のお手伝いをしてきました。現在は拠点の3か所は私たちが運営しますが、その他は、地域地域の作業所でネットワークを作ってもらい展開してもらっています。あとでまた話します。

大きく分けて、4つの事業をしています。1つめは共同受注。これは先ほども言いました優先調達推進法の兵庫県の共同受付の窓口を兵庫セルフが担当しています。それに先駆けて、兵庫県は優先発注という制度を持っています。県庁内、県民局も含めて100万円までの少額の発注に関しては、優先発注として私達が受けて、県内の作業所に発注しています。企業からの下請け、記念品などもやっています。企業の共同受注もやっています。

スルッとKANSAIやラガールカードを持っている方いらっしゃると思います。スルッとKANSAIのワンデーチケットとか3デイチケットを使われた方もおられますね。スルッとKANSAIは近畿圏の私鉄・バスの共通のカードですが、その封入作業は、兵庫県でやっています。私達が受けて、それを県内の7施設で共同事業としてやっています。いろいろ問題、課題はありますが、それは後でまたお話しします。

2つ目、共同販売もしています。神戸ふれあい工房。高速神戸や神戸駅をお使いの方は、地下街を歩いて海の方へ、アンパンマンミュージアムに向かう方に神戸ふれあい工房があります。神戸市内を中心とした作業所製品を販売するところです。今朝も立ち寄りました。神戸駅からエスカレーターで地下に降りると2つに分かれます。アンパンマンミュージアムと逆、右手にふれあい工房があります。ちょっと地理的なハンディがあるのですが、神戸市社会福祉協議会から委託を受けて店舗販売をしています。

通信販売もしています。楽天市場にも出店しています。イオングループのバザーなどもあります。最初、お弁当の話で言いましたが、県庁2号館のカフェセルフもしています。ここには出していませんが、今年4月から兵庫セルフセンターとして就労B型事業をはじめました。ここに出ている神戸ふれあい工房、カフェセルフが主な作業場です。接客業、

サービス業に特化した就労B型事業所を立ち上げています。

3つめとして障害者のインターンシップ事業。兵庫県と、どうすれば障害のある方が就労できるのか、そういう仕組みを作っていこうということで、平成16年にはじめた事業です。当時、ほぼ10年前ですが、滋賀県庁で障害のある人たち、特に知的障害者が働いている仕組みがあると聞きました。当時の井戸知事が、滋賀県庁に国松知事を訪ねたとき、知事室にお茶を運ぶ女の子がいた。その子がダウン症の子だったそうです。

兵庫県でもやろうと、いろんな仕組み作りを命じられました。平成17年から障害のある人の短期実習、今は精神障害者の短期雇用も制度としてあります。それが障害者のインターンシップ事業です。全国的にもこのような事業はほとんどありません。全国からいろんな見学者も来られ、その都度、宝塚から駆り出されて説明に来ています。

4つ目。ネットワークの構築、講座・勉強会の開催、情報発信・情報管理、授産活動アドバイザー事業もしています。1つ1つについて、何が問題でどう考えていけばいいかを話します。

兵庫県の優先発注が、将来的には優先調達法に行くと思っています。その中で、1つ目、「役務」。役務はやりやすそうで、実は非常に難しいお仕事です。例えば今後出てくるだろう優先調達法では、国有地の除草や県の遊休地の除草などが出てくる可能性があります。そうすると、広さ、つまりボリュームがとてつもなく大きくなる可能性があります。優先調達法の中で、例えば1000平米の仕事が出たとします。1つの作業所ではできません。10の作業所で100平米ずつ担ってできるような仕組みを作っていこうということになります。

そうすると10作業所が、1つの仕事をします。除草はだいたい20mmでそろえるのが基本です。施設ごとに3センチとか5センチとかばらばらにしたとすると、国は1000平米を仕事に出しているのに、まだらな仕上がりになります。これは仕事にはならない。依頼者が仕様を指定したなら、1000平米が全部均一の仕上がりでなければならない。役務の仕事を得たときには、各作業所のスキルを同じにしないとイケません。

1つの所で4カ所の作業所が作業するとき、事前に4カ所の作業所に来てもらいます。提出書類の書き方や、作業前、作業中、作業後の写真を取らなければなりません。写真の撮り方、図面の引き方、完成の報告書の書き方、それらを全部同じにしなければなりません。除草はやりやすそうですが、共同の作業とするには、スキルを合わせるという大きな壁があります。またそれぞれの作業所が持っている機械がある程度性能が同じでなければ、均一な作業はできません。今後の役務はそうした壁をクリアしていくことが必要となります。

2つ目。おそらく優先調達法で出てくる2つ目として印刷があります。国がこのようなパンフレットを10万部作るようにという仕事があるとします。兵庫県内で印刷をしている作業所は10カ所ほどあります。でもフルカラーの機械があるところは数えるくらいしかありません。3つ折りなども機械でやるのですが、それができる機械がある作業所が何カ所あるかで違ってきます。このように1つの作業所ではできない大きなボリュームがでてくるとき、機械を同じにしたり、ソフトを同じにしたりしないとイケないという問題もあります。

ひょうご聴障ネット講演会

「生き生きと働くなかまたち～共同作業所の現状と課題～」

印刷のところで、名刺印刷があります。特に年度末には、県庁や市役所などでは異動があります。名刺はすぐに必要です。名刺をしている作業所は県内で10カ所ほどでした。以前は名刺の注文はいくらでもありました。供給できないことがあった。また作業所によりスキルの違いがあり、仕上がりがまちまちだった。

その問題を解決するため、新体制移行時にいろいろな補助金が出ました。その移行基金で名刺をしている作業所のネットワークを作りました。作業所の印刷ソフトは、昔の活版印刷ではありません。「名刺ほんぽ」と言いますが、ネットワークに入っている作業所は全部同じソフト、同じプリンターに揃えて、ある管理会社がデータ管理をします。すると県庁から発注があれば、部署や職名などを変えていきます。ネットワーク参加の施設ならどこでも同じ名刺印刷ができるという、そういう仕組みが必要となります。「名刺ほんぽ」で統一したものができます。

例えば名刺に点字を入れてほしいという依頼もあります。県内で、名刺に点字印刷ができる場所は2カ所です。そこもネットワークに入ってもらいました。今までのように、個々の施設で対応するのではなく、ネットワークで仕事を受けていく仕組みが求められています。その中心を私たちが担わないといけないと思っています。

おのころの家でしたか、記念品という話もありましたが、県の予算も縮小され、記念品も小ぶりになっています。記念品というからには、精度が求められます。もらった人が満足できるものでなければ困るわけです。自主製品といえども精度の高いもの、付加価値の高いものが求められます。うちはこれしかできない、という考え方はなくしていかなければ生き残っていけないでしょう。

余談になりますが、4つの作業所の報告から思ったことがあります。これは私にも責任があるのかなと思ったのですが、就労継続B型事業が結構多い。私が関わっています神戸市の事業サポーターでも、5年前には神戸市内で144カ所の小規模作業所があったが、昨年度末で「ゼロ」となりました。新体制に移行するとき、7割が就労継続B型事業を選択しています。なぜか。それは生活介護に行きたかったが、生活介護は障害程度区分が必要です。障害程度区分で3が取れないから、仕方なしにB型を選んだ作業所が多いのではないかと思います。実は、そんなことはなくて、ちゃんとした情報があれば障害程度区分3以上は取れる仕組みがあるんです。79項目は介護認定、あと27が障害特性です。そこにいろんな落とし穴がありまして、正しく受診すれば3は取れる、というのが私の見解です。

今週も高砂の精神障害の作業所に行きました。そこは就労B単独でやっています。ですが、職員を確保できないので就労Bでは運営できない、という相談がありました。生活介護を取って、多機能にしないといけないが、精神障害では生活介護が取れないと聞いて、その話を鵜呑みにされている。そこでアドバイスに行ってきました。正しい受診の仕方をすれば、取れます。障害程度区分は、障害の程度を見るのではなく、障害があるがゆえの生活のしづらさを図るものだと思います。その人の生活の実態に合わせた区分でなくてはいけないと思っています。アドバイスをして、職員研修も考えています。

先ほども職員の数が確保できないという話がありました。昨年10月か11月、神戸市の

新体系に移行した旧小規模作業所の職員研修をしました。継続的にしていますが…。そこで個別支援計画の立案の仕方、視点の置き方の講習を、私が担当しました。社会福祉法人系施設は職員研修の機会が結構ありますが、機会の少ないところはノウハウがないのが現実です。今年度も、年3回くらい企画しようと神戸市と話をしました。今日の4作業所の方で必要があれば、兵庫セルフセンターはアドバイザー研修もやっていますので、ご連絡ください。話がそれましたが。

作業コーディネートです。スルッとKANSAIに参加される場所は事前に必ず集まってもらって、作業手順を説明します。作業手順は大変大事です。手順がまちまちなら、客は怒ります。今は精度が同じになってきたのでクレームは無くなってきましたが、はじめの頃はクレームがたくさんあり、御堂筋にあるスルッとKANSAIの本部へお詫びにいきました。

最近ポスティングもしています。苦い経験があります。県の広報誌「ひょうごニュース」が月一回配布されていますが、3年前に兵庫県の北の方の市で、その市の「県民だより」の配達を作業所のネットワークが入札で受注したのですが、ふたを開けてみるとたいへんな数でした。都市部は住宅が密集しておりポスティングもしやすいですが、郡部では1軒1軒が離れているのでポスティングは大変です。サンケイリビングは東灘など地域限定で作業所が参加してポスティングしています。ポスティングには精度がいりません。区域ごとに分けられて、期限があるくらいです。

ダイレクトメールの封入なども共同でできる事業です。しかし、ここでも精度が求められます。封入の順も決まっているので、1つでも間違えるとダメです。これも参加される場所は事前に全部来てもらってレクチャーする必要があります。

啓発グッズですが、今年は知事選と神戸市長選があります。選挙の啓発グッズはよく作業所に回ってきます。今年は選管に提案させてもらっています。あぶらとり紙やティッシュの封入などは作業所ができる仕事です。ですが、数が多いので1作業所のできる仕事ではありません。

ワンコインせるぷです。先ほどのおのころの家さんのスライドにクッキー100円というのがありました。100円で売れるお菓子を企業の社員の休憩スペースに置きます。お金を入れてもらいます。県下では7~8カ所です。

ここで大事なことは、あえて失礼なことを言いますが、福祉の人間は批判されることに慣れていません。いいことをやっている、という思い込みがあります。自分のところのお菓子が一番おいしいという思い込みがあります。しかし、売れないものは売れません。ワンコインせるぷでめざしたのは、競争力です。

三宮に大きな外資系の製薬会社の本社があります。そこと交渉して4~5年前からはじめた事業ですが、社員の休憩スペースにそれぞれの作業所の100円のお菓子を置きます。集金箱も置きます。その入れ替えはそれぞれの作業所がやります。A作業所が、売れているだろうと思って、入れ替え品を持って行ったら、全然売れてなくて、となりのB作業所は全部売れている。Cも半分位は売れている。この違いに気づいてほしいという狙いがあり

ます。

消費者は正直です。おいしい物には投資します。マズいものにはしません。その違いを知ってもらう。なぜ売れないのかと売れ筋を買って食べてみると自分ところよりもはるかに美味しい。「なぜ違うの？」と考えるところは伸びていきます。そうした運営が必要です。

カタログ販売を定期的に行っています。季節ごとのカタログ、県庁と県民局管内に全部渡しているカタログです。2年前から県域版もあります。兵庫県は10の県域があります。県域ごとの売れ筋商品をカタログにしていくということを行っています。

さきほど、バザーの話をしました。イオングループでのバザー販売をいいました。我々兵庫セルプとしては、バザー販売に力を入れています。何に力を入れているのか、売り方です。従来の施設のバザーは長机をおいて、商品を無造作に置き、職員が立っていました。その姿ではお客さんは買いません。どうしたらお客さんが買いたいと思うか。そこには、物を見せる仕掛けが重要です。無造作においていいものと、そうでないものがあります。売り方、見せ方の統一も必要です。例えばバザーの会場が作業所ごとに服装がバラバラでは、お客さんは買いたいとは思いません。統一性が必要です。買いたいと思うような演出が必要です。こちらから押し付けるのではなく、それぞれの作業所が考えてほしいと思っています。自主製品はワンウェイではありません。リピーターをどう作るか、です。買いたいと思う物を作る。買いたいと思うような演出を作る。ストーリーがないと、物作りはできないと思います。

先ほど述べた県庁2号館のカフェセルプです。5年くらい前に、井戸知事に提案しました。2号館の一階に以前は一般企業の喫茶店がありました。全然流行ってなくて、暗かった。その場所で知事に喫茶店をしたいと直談判した。そして全国の県の庁舎の中での事例はあるのか、といろいろと調査しました。

大分県庁の本館ではなく別館の職員食堂は、就労B型の事業所がやっています。そこは、食堂と庁舎内のお弁当をやっています。見て分かりやすく、構造化されています。そこでいろいろと勉強し、仕組みを盗んできました。それがカフェセルプの弁当販売の仕組みです。

宮城県庁の最上階にレストランがあります。大分県庁は職員食堂ですが、宮城県庁は一般の食堂を展開しています。そこは、精神の就労B型事業所です。県民が来るし、眺めがいいです。全面ガラス張りなので仙台市内が一望できます。そこで、特に精神の方がやっています。見学に行き、いろいろと盗んできました。

もう1つ。カフェセルプの資料左下にあるパンについて。県庁内でパンを焼いています。パナソニックが新しいパンの機械を作った。市販と変わらないパンができるとの情報を得た。探したら、徳島県で事例があった。すぐに徳島に行き、冷凍パンの仕入れなどを教えてもらい、今県庁でやっています。もし県庁2号館に行かれたら、時間帯によっては、パン焼きのにおいがしていると思います。作業所の人やインターンシップの方も働いておられます。

大事なことは、見せる工夫です。人が入りやすい雰囲気はどう作るかです。福祉の喫茶

店などはたくさんあります。1回は入るが2回めはちょっと…と思わせるとダメです。何度もいきたいと思わせるにはどんな工夫が必要か。県庁の上にある山手大学とタイアップして、定期的に音楽サークルのコンサートをしたり、そのグッズの販売もしています。見せる工夫、行きたくなる工夫が必要になります。

次のインターンシップについては先ほどお話したので割愛します。

しごと高度化研修事業です。兵庫セルブの大切な仕事で、力を入れています。どういうことか。売れる商品づくり、客が買いたい商品づくりをしましょうということです。自分がOKでも、お客がノーなら商品価値はない。そのために、何をするか。企業なら新商品を作るときに開発費用や宣伝費用があります。福祉関係にはありません。だからこれは実践デザイン講座です。買いたいものは、パッケージが大事です。封印の方法もいろいろ種類があります。そういうことを連続の研修でプロに教えてもらいます。

店舗販売の実践も定期的にやっています。兵庫県は広いので、淡路の人に神戸に来てもらうのはちょっと心苦しいのですが、それぞれの県域でできればいいが、物理的にも費用的にも難しいのが現状です。実践デザイン講座は、神戸芸術工科大学と共同事業としてやっています。

被災地へ行った話をしましたが、今年の3月に、実践デザイン講座を仙台で2回してきました。その時には東北芸術工科大学という山形にある大学に協力したいと言っていました。実際にやって、そのときは2人の先生でしたが、今までにためた車いすのグッズを会場で全部広げて、話よりもおもちゃであそぶのが楽しかった。という参加者の話もあります。それぞれの先生はプロダクトデザインといって、商品開発をされている方々です。特に障害関係に興味を持っておられる方です。障害がある人が使いやすいプロダクトデザインです。これは神戸芸術工科大学でもやっています。随時兵庫セルブから案内をしますので、参加してみてください。

平成22年からの事業、スイーツ甲子園をはじめました。作業所がいろいろな商品を作っています。お菓子、クッキー、ケーキ、それらを我々は比較されることや批判されることに弱い。それではいい商品はできないので、あえてスイーツ甲子園を始めました。今年4回目をやりました。1回目は兵庫県内だけでしましたが、そんなおもしろい企画なら一緒にやろうと他県から提案がありました。井戸知事が事務長の関西広域連合があり、近畿の奈良以外の2府4県に徳島と鳥取も入っています。3回目からは増えて、4回目は大阪、京都も入ってきました。

2回目から他県といっしょにやると、グランプリは全部兵庫県外でした。つらい。元町商店街の連合会とコラボでしています。連合会の会長さんがいっしょにやろうということで、風月堂ホールなどを会場としてやっています。

ちなみに、第3回グランプリは滋賀の作業所が作った甲賀流忍者バウム。ここはストーリーがいい。先ほどものづくりにはストーリーが大事と言いました。味はいまいちですが、作業所の近くの第二名神のパーキングエリアに行く人たち、大型バスの利用者は「アリバイのお土産」を買います。甲賀に行ってきたよ、というアリバイがお土産です。味よりパ

パッケージが大事です。甲賀に行って、今流行りのバームクーヘンのお土産というところ、もらった人はお土産で旅行先がわかります。そこを狙ったわけですね。お土産に美味しいものがないですよ。そこそこでしょ。だけどそこにちゃんとストーリーがある。そして1日限定何個の製品。この限定はストーリーとしておもしろい。楽天市場もそうですね。在庫あと〇個とすると一気に売れます。

4回目にグランプリを取ったのは徳島の和三盆のお菓子です。これはおいしいです。パッケージがまたすごい。映像がなくてすみません。一流のプロのデザイナーを入れてあります。投資をしているわけです。だから、見返りがあります。投資をすることが我々は苦手です。「そんなお金ない」と思いますが、ここに抜け道があります。企業とどう連携するか、です。企業は社会貢献をしたがっています。だったら企業にどういう提案ができるか、です。

日本財団というモーターボートの財団があります。ここは、福祉関係の事業に関しての助成を積極的にしています。実は、嘆いておられることがあります。申請があつて、確かなものと思ったら許可を出し、お金を出す。でも、関西のある人たちは、応募して、受かったらバンザイをする。補助金をもらえる、「やった！」ということで喜ぶ。喜んでから計画の練り直しをする。でも東京から北の人は、当たって当然という態度をする。企画書通りの物を買う。この違いは何だろう、と聞かれても、関西人の私にはわからない。

私たちが何をしたいのか、そのためにはどういう投資をしないといけないか。ストーリーがそこにあるかどうかです。おもしろい話では、宮城県の小さな町、人口4万人くらいです。ある施設が日本財団に600万でイタリア製のジェラートの機械を申請しました。活用の仕方ですが、町中の一番大きなスーパーに自分の施設の店を出しています。スーパーは野菜が売れ残ったら廃棄処分します。廃棄処分をする野菜でジェラードを作ろうというわけです。しかも小ロットでできる機械です。トマトのジェラートの後、すぐにオレンジを作る。15分で洗浄できる機械で、600万円します。実際に行って食べ過ぎてお腹を壊したことがあります。そこまで調べあげます。ターゲットも明確です。ならばいくらでも補助対象になるということです。今後、いろいろな事業を考えると、ストーリーを描くことが大切だと思っております。

このような授産活動アドバイザー事業もしています。必要があれば何らかの協力ができると思います。

仕事力アップ交流研修について。昨年度から私が力を入れている事業です。例えば販売力を高めるためにはどんなスキルがあるか。ひとつ農業を取り上げています。淡路だとタマネギ。白菜も余っています。余ったものを、どんな事業に展開していくのか。玉ねぎをキャラメル状にして出荷する事業を作業所でしています。NPO関係の作業所が企画しています。福祉の発想ではなく、別の発想でどんな面白いことができるか、ということも企画しています。宝塚では、入所、通所の施設長をしています。神戸に来たらこのようなことをしている。頭の中の切り替えが必要です。

兵庫セルフセンターについて、簡単なご紹介をしました。福祉という限られた中で物事を考えるのではなく、幅広いエリアの中で考える必要がある。そこには物語性、ストーリー



一がいると分かっていたけるとありがたいです。これで終わります。ありがとうございました。

《拍手》

質問①A／盲ろう者です。目と耳の重複障害を持っています。山崎講師のお話を聞きました。兵庫県内の作業所でネットワークがあるときいて、よく分かりました。素晴らしい話でした。盲ろう者の作業所の他、精神、知的の作業所も見学されことがあるか、お聞きします。私も、今報告があった夢ふうせん作業所に通っています。山崎さんは、見学をされた経験がありますか。まだなら、ぜひ来てください。盲ろう者が針に糸を通す時、普通の針では見えません。太めの針を使うところを実際に見てほしいです。色の判断ができないので、ボランティアに助けられていることなども。作業所が、今後つぶれることのないように、兵庫セルフセンターとパイプを作って、連携していきたいです。

山崎／私は県内の施設、事業所、作業所の3分の2くらいは知っています。報告のあった作業所の中で、はりまふくろうの家とたつのころうあハウスは行き、中も見学しました。残念ながら、夢ふうせんにはいかなければならないと思いつつ、まだ行っていないのが実情です。ぜひ今度行きたいと思います。仕事ぶりを見せてください。私たちがどういう形で連携できるかを考えたいと思いますので、そのときはよろしくお願いします。

A／はい、分かりました。それから、今の発言に関して、答えます。夢ふうせん作業所には私だけではなく、他にもたくさんいます。11人いるので、それぞれのコミュニケーション方法も見ていただきたいし、品物を作っている状態も見学していただきたいです。

山崎／ありがとうございました。必ずいきます。

A／ありがとうございます。

質問②B／はりまふくろうの家です。お訊きします。兵庫セルフさんのカタログをいただきます。お歳暮やお中元などを注文する方法ですが、現物を見て注文したい場合は、どうすればいいですか？素晴らしい運営方法だと思います。私たちもがんばろうとしています。売り上げが増えないです。売り上げを伸ばすにはどのような工夫をしたらいいのでしょうか？おかずを日替わりにするなどの工夫でしょうか？また市役所のロビーで販売するのはいいというお話でしたが、ピラを作成し配布した方がいいのでしょうか？ボチボチ進めていけたらいいのですが、ろうあ者が作業していることがわかって来ていただけたらいいと思っています。

ひょうご聴障ネット講演会

「生き生きと働くなかまたち～共同作業所の現状と課題～」

山崎／何を誰に売りたいのか、ということが明確にあるかどうかが大事です。1つは、今県庁で売っているお弁当はメニューを公開しています。それと、お弁当を食べられた方の感想、苦情など全部聞いています。お弁当を作っている作業所と、兵庫セルプ、そして私のアドレスの入ったメーリングリストを作っています。そのメーリングリストで瞬時に情報が共有できます。先日のお弁当のおかずがちょっとじゃりっぽかったそうです。ほうれん草の洗浄が完全じゃなかったんだと思う。そんな苦情が食べた人からすぐに店舗に入り、即、MLに流れます。作業所は何が悪かったのか、洗い方の問題か、どこかで何かが混入したか、即座に調べて、メーリングリストに流します。流した情報は、即苦情を寄せられた方に返します。すると苦情を言った人が、このように解決したと安心されて、また次の日もお弁当を買ってくれるでしょう。

B／私たちもそのような苦情を受けることはあります。繰り返さないように工夫したりします。なかなかうまくいかないとき、うまくいくときの繰り返しかえしです。

山崎／お客さんの声を聞くだけではなく、返すということを意識しないとものは売れないと思います。

B／ありがとうございます。

質問③C／夢ふうせんです。先ほどAさんから作業所に見学に来て、とのPRがあったので、私からもぜひお願いします。私から質問です。今回、作業所について発表し、講演もお聞きしました。県庁にカフェセルプがあることが分かりました。そこに、夢ふうせんの商品を置かせてもらおうとしたら、どんな条件があるのでしょうか？

山崎／条件はありません。カフェセルプの職員が売りたいと思えるものは、何でも置いてください。それだけが条件です。ぜひご提案ください。